

01-073

第2子を妊娠した母親への育児支援に関する助産師の認識第一報 第1子に関する母親の育児相談について

後藤 千佐子、吉川 由希子

敦賀市立看護大学

【目的】

第2子を妊娠した母親に対して、出産後の子育て意識した関わりや指導、母親からの相談への対応についての助産師の認識を明らかにすることを目的とした調査を行った。本報では、第1子に関する母親から助産師への育児相談の結果について報告する。

【対象と方法】

対象は、関西地方2県の広域災害・救急医療情報システム医療情報ネットに記載されている分娩施設または産科を標榜している施設に勤務する助産師565人である。方法は無記名自記式の質問紙調査を郵送法で行った。分析は選択式の回答を記述統計で、自由記述は意味内容の意味内容をコード化し類似性によりカテゴリー化を行った。本研究は研究者が所属する研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

188人より有効回答を得た(有効回答率33.3%)。助産師が第2子を妊娠した母親から第1子の育児に関して相談を受けたことが「よくある」は19.1%、「時々ある・たまにある」は63.3%、「全くない」は8.0%であった。育児相談の内容として、15のサブカテゴリーと6つのカテゴリーが抽出された。《第1子の行動に関連した相談》では、「赤ちゃん返りや退行現象を起こす」、「やきもちをやく」、「精神的に不安定になる」、「言うことをきかない」、《第1子の子育てについての相談》では、「妊娠中の第1子との接し方」、「第1子の授乳や断乳」、「第1子の成長に関連した育児相談」、《きょうだいの関係性に関する相談》では、「第1子が第2子に関わることへの不安」、「第1子が第2子を受け入れない」、《子どもが2人になることで生じる母親の不安やストレス》では、「子どもが2人になったときの育児の不安」、《育児サポートに関連する相談》では、「母親の入院による第1子の育児サポート」、「日々の生活における育児の協体制」、《分娩に関連する相談》では、「立ち合い分娩に関連したこと」、「第2子分娩についての不安」などであった。

【考察および結論】

82.4%の助産師が第2子を妊娠した母親から第1子に関する育児相談を受けていると認識しており、相談の内容から第1子の行動面に関連した母親の困惑や育児の悩み、2人の子育てに対する不安やストレスが明らかとなった。第1子の子育て経験があっても2人目を妊娠した経産婦には新たな育児不安が生じる可能性を配慮した新たな支援プログラムが必要であると考えられる。

01-074

生後5か月と1歳6か月・2歳児をもつ母親の育児ストレスに関する比較検討

島澤 ゆい

金城学院大学 人間科学部多元心理学科

【目的】

近年、児童虐待や母親の育児に関する困難感が社会問題となり、子育て支援の重要性が注目されている。そこで、本研究では、困難感の要因調査やそれに対応する支援の方法を分析することを目的とし、母親が感じている育児ストレスについて、本邦における調査研究数の少ない子どもの年齢別による比較から相違点を検討した。

【方法】

調査期間は20XX年8月から9月の2か月間であり、調査対象者は、A市の離乳食教室、1歳6か月健診、2歳児歯科健診に参加した母親の内、調査に同意した54名であった。倫理的配慮としては、保健センターの担当者に調査目的を口頭及び文書で説明して理解を得た。また、対象となる母親には、研究の目的とプライバシー保護について説明した同意書に署名を求めた。質問紙は無記名で行い、その場で配布・回収した。質問項目は、フェイスシート(年齢・仕事の有無)、吉永ら(2006)の育児ストレス尺度(経験の程度のみ使用)を用いた。分析方法は、生後5か月と1歳6か月・2歳児における2群間の育児ストレスの差を検討するため、t検定を行った。

【結果】

分析の結果、育児ストレス尺度全ての因子において、生後5か月児よりも1歳6か月・2歳児をもつ母親の平均点の方が高いという結果が得られた。そして、育児ストレス全体で有意差が認められ($t(52)=3.25, p<.001$)各因子では「親としての効力感低下」において有意差が認められ($t(52)=4.07, p<.001$)、「育児による拘束」「サポート不足」においては有意の傾向が確認された。一方、「子どもの特性」「育児知識と技術不足」では2群間の有意差が認められなかった。

【考察】

本研究の結果、生後5か月児をもつ母親よりも1歳6か月・2歳児をもつ母親の方がよりストレスを抱えていることが示された。これは先行研究の結果と類似するものであり、本研究は支持されると考えられる。また、「親としての効力感低下」において有意差が認められた点について、しつけや叱り方といった子育ての仕方に関するストレスは、1歳6か月・2歳という行動面の発達が活発な時期の子どもに対してより感じやすいためであると考察される。一方、「子どもの特性」「育児知識と技術不足」は、それぞれの月齢で新しい課題が出現することにより、子どもの年齢によるストレスの差がなかったと推察される。